

「たばこ害」の正しい知識を

女性喫煙者にも警鐘



たばこの害が、叫ばれて久しい。にもかかわらず、若い女性がたばこを吸う姿が目立ち、県内の女性の喫煙率は全国平均よりも高く、12%を超えている。男性も女性も、喫煙は肺がんをはじめ、多くの疾病と関係。妊産婦では、低体重児の出産率が上昇—との医学的データも。県民健康づくり計画「健康ちば21」(平成13〜22年度)は、たばこ疾病の関係を県民により理解してもらった上で、数値を掲げ喫煙率の低下を訴える。今回は、禁煙教育に取り組む女子大学の聖徳大学、聖徳大学短期大学部(松戸市岩瀬、川並弘昭理事長)を取材し、特に女性と喫煙をめぐる問題を聞いた。



聖徳大学生部長 川並 弘昭氏

「貫いた禁煙」
聖徳大学と聖徳大学短期大学部は創立以来、学生の校舎内禁煙を貫いている。女子大学として、学生の健康を第一に考えての禁煙教育。その教育理念は揺るぎがない。

四年制大学が開校した平成二年、「二十歳を超えた入学生には、たばこを吸う権利がある」と声が上がった。しかし、学校側はこの声を頑として聞き入れなかった。その底流には、「男性と女性とは同種でも、同質ではない(川並光昭学生部長)と学生への深い思いやりがある。つまり男性と女性とは体のつくりが異なり、女性は将来の出産という大役を控えている。」

さまざまな医学的な調査で、妊産婦の喫煙は流産、低体重児、先天異常児の出産率が高いと報告されている。さらに、約五年前、教養科目に講座「女性と健康」

「本学生生活にこんな場でも禁煙です(学生生活に関する心得)。校則に禁煙を明確に規定した上で、たばこの害を理解してもらうために、入学式では保護者を含め全員にパンフレットを配布し、オリエンテーションではビデオを上映している。」

「煙率は16%」
同大の禁煙教育は徹底している。

「校舎内は全面禁煙」
健康への意識向上

聖徳大・短大

「たばこは本人はもちろん、周りにも大きな迷惑をかける」

「知識に片寄り」
喫煙は、肺がんや気管支炎、不整脈による突然死、心筋梗塞などの危険度を増すとされる。果たして、県民はたばこ疾病の関係をどれほど知っているのだろうか。

県生活習慣状況調査によると、「喫煙でかかちやすくなる」と思う病気が、▽肺がん95・2%▽ぜんそく45・1%▽気管支炎62・1%▽心臓病38・8%▽脳卒中28・7%▽胃潰瘍20・5%▽妊婦への影響65・8%▽歯周病21・2%。肺がんだけが飛び抜けおり、たばこ疾病の関係で、県民の知識の片寄りが顕著。県はすべて100%とする知識の普及を図る。

いま、最も問題となっているのが間接喫煙。たばこの煙には、約四千種類もの

化学物質が含まれているが、喫煙者が吸う煙(主流煙)よりたばこの先から立ち上る煙(副流煙)の方が、有害物質の濃度が高いことが分かっている。夫が喫煙する家庭では、妻の肺がん死亡率は約一・五倍とのデータも。喫煙者は無意識に周りに迷惑をかけているので注意が必要だ。卒業生の意識調査も、「人のいるところで吸ってほしくない」が非喫煙者の五割以上を占め、迷惑は明らかだ。

ひと昔前と比べ禁煙は社会的に追い風。川並学生部長は「米国大学では、三年前からキャンパス内は禁煙が常識です」と言い、片平教授は「これからは健康教育の時代」と断言。聖徳大は今後二年くらいをかけて、先生、職員を含めキャンパス内全面禁煙に移行していく方針だ。

川並学生部長は、こう強調した。ただ、頭ごなしに叱っても、なかなか嗜(し)好品であるたばこはやめられない。ならば、「なぜ喫煙がいけないのか」を理解してもらおうと、「教育」に同大は重点をおいている。

例えば、校則に反し校舎内喫煙が見つかった場合にも、同大は処分よりも、その後の個別指導に力。指導は、片平教授のほか禁煙した元ヘビースモーカーの先生もあたるなど、より実践的だ。

卒業生の意識調査のたばこの害の設問で、「妊婦が吸ったり、間接的に吸わされると胎児に影響がある」と約92%の学生が答えているほか、「妊娠・出産を除いても女性はたばこに含まれる有害物質の影響を受けやすい」ことについても約39%の学生が認識している。

また、子どもへの影響に

「肝心なのは、学生にたばこの有害性を理解させることだ。」

「たばこは本人はもちろん、周りにも大きな迷惑をかける」

「知識に片寄り」

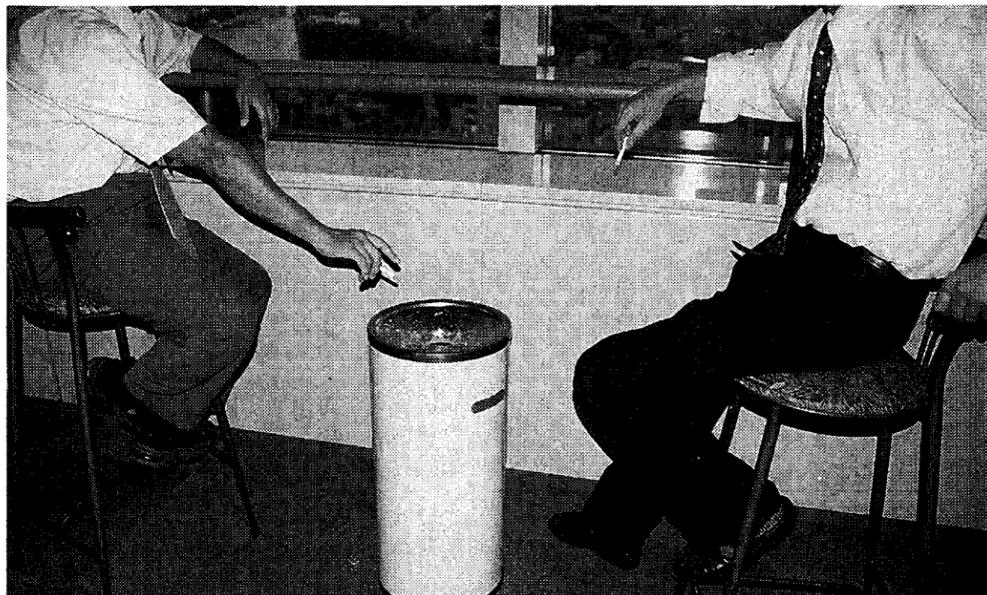
喫煙は、肺がんや気管支炎、不整脈による突然死、心筋梗塞などの危険度を増すとされる。果たして、県民はたばこ疾病の関係をどれほど知っているのだろうか。

県生活習慣状況調査によると、「喫煙でかかちやすくなる」と思う病気が、▽肺がん95・2%▽ぜんそく45・1%▽気管支炎62・1%▽心臓病38・8%▽脳卒中28・7%▽胃潰瘍20・5%▽妊婦への影響65・8%▽歯周病21・2%。肺がんだけが飛び抜けおり、たばこ疾病の関係で、県民の知識の片寄りが顕著。県はすべて100%とする知識の普及を図る。

いま、最も問題となっているのが間接喫煙。たばこの煙には、約四千種類もの

化学物質が含まれているが、喫煙者が吸う煙(主流煙)よりたばこの先から立ち上る煙(副流煙)の方が、有害物質の濃度が高いことが分かっている。夫が喫煙する家庭では、妻の肺がん死亡率は約一・五倍とのデータも。喫煙者は無意識に周りに迷惑をかけているので注意が必要だ。卒業生の意識調査も、「人のいるところで吸ってほしくない」が非喫煙者の五割以上を占め、迷惑は明らかだ。

ひと昔前と比べ禁煙は社会的に追い風。川並学生部長は「米国大学では、三年前からキャンパス内は禁煙が常識です」と言い、片平教授は「これからは健康教育の時代」と断言。聖徳大は今後二年くらいをかけて、先生、職員を含めキャンパス内全面禁煙に移行していく方針だ。



たばこは本人はもちろん、周りにも大きな迷惑をかける

校舎内は全面禁煙 健康への意識向上

聖徳大・短大



聖徳大のパンフレット

を新設。保健師の資格を持つ同大保健センターの片平敬子教授らが指導にあたり、

「健康ちば21」には県内の喫煙率について、男性で35・1%以下、女性で9・7%以下の目標が掲げられた。このためにも、県は喫煙者の禁煙支援はもとより、普及啓発活動の強化によって、新たな喫煙者を増やさない考えた。

有害性を熟知

「肝心なのは、学生にたばこの有害性を理解させることだ。」

たばこ